

# 教育研究業績書

2016年10月01日

所属：看護学科

資格：講師

氏名：藤田 優一

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	小児看護学
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 自己学習票を持込み可とした小テストの実施	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）において実践した。毎回講義の最後に小テストを実施した。問題は前回の講義内容より、看護師国家試験の過去問を2、3問出題した。小テストは、前回の講義後に配布された自己学習票（A5サイズで左半分の10cm×10cmの枠内のみ書き込み可）の持ち込みを可とした。自己学習票の持ち込みをするには講義が終わってから書き込まなくてはならないため、学生に復習の習慣をつけることができた。小テスト後に、教員が問題の解説を行い、自己採点をした。「講義で聴く」「講義後にテキストを見直す」「自己学習票にまとめる」「小テスト中にまとめた内容を読む」「小テストの解説を聴く」「定期試験前に復習する」と最低6回は反復して学習ができた。これまでに前回の講義を欠席した学生を除いて、自己学習票を白紙の状態でも提出した学生はならず、講義内容の復習につながっていると考えられる。小テスト計29問の平均正答率は82.6%であった。授業アンケートでは、自己学習時間（3.1ポイント）が全科目の平均（2.4ポイント）よりも高い結果がみられた。
2. ビデオ撮影によるリフレクションの活用	2012年9月～2015年3月	兵庫医療大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3、4年次配当、必修2単位）において実践した。実習前の技術演習では小児のバイタルサインを測定する際の学生自身の様子を他者の視点から見られるように、パソコンとビデオカメラを連動させて簡便に録画と視聴ができるシステムを作成して活用している。学生からは「自身がどのような表情で子どもと接しているのかがわかった」「声かけができていくのかについて省みることができた」という意見があり、効果がみられた。
3. 統合看護実習における学生自身の実習目標の設定とプレゼンテーション	2012年10月～2015年3月	兵庫医療大学看護学部実習科目「統合看護学実習」（専門科目、4年次配当、必修3単位）において実践した。教員があらかじめ作成した実習目標を達成するために実習するのではなく、学生はこれまでに経験した実習をもとに自身の実習目標を考え、関連する文献での自己学習を行った。病院実習の前に、学生は自身の実習目標についてスライドを作成し、実習グループ内でプレゼンテーションを行った。また、実習後にどこまで達成できたかを実習で学んだこととともにプレゼンテーションを行った。
4. 文献検索の指導用に複数のキーボードとマウスを接続したパソコンの活用	2011年5月～現在	兵庫医療大学大学院看護学研究科（修士課程）演習科目「小児看護学演習」（専門科目、1年次配当、必修2単位）において実践した。医学中央雑誌、Medline、CINAHLを用いて、小児看護に関連する文献検索の方法を指導する際に、1台のパソコンに受講者数分のキーボードとマウスを接続した機材を使用することで、教員と院生が同じ画面を見ながら、院生も適宜パソコンを操作して文献検索の方法を習得できるように工夫をしている。
5. 講義資料のダウンロードができるウェブサイトの活用	2011年4月～2015年3月	兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護学援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。家族支援看護学のウェブサイトを作成し、サイト内に本学の学生のみがアクセスできるページを作成した。学生の学習効果を高めるために、講義の復習の際に活用しやすいインターネット経由で講義資料および参考資料、動画をダウンロードして閲覧できるようにしている。
6. 実習期間中のリフレクションの実施	2010年4月～2015年3月	兵庫医療大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3年次4年次配当、必修2単位）において、学生の実習が3年生の3月で前半が終わった段階で、これまでの実習の振り返りとしてリフレクションを実施した。それらを卒業時の到達目標と照らしあわせてどこまで達成できたか、到達できていない項目は今後どうやって到達していくかについて、グループワークを行い、学生間でプレゼンテーションを行った。学生は後半の4年生の実習での課題が明確となり、「実習のやりがいが出てきた」「自分の改善点が見えてきた」などのコメントが多くみられた。
7. ルーブリック評価表を用いた実習の評価	2010年10月～2014年3月	兵庫医療大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3年次4年次配当、必修2単位）において、学生の

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
8. PBL形式を用いたグループワークによる看護過程の展開	2009年4月～2015年3月	<p>実習内容の評価を行うための指標として、ルーブリック評価表を作成した。これを用いることで、教員間での公平な評価が可能となり、指導のポイントの明確化もできた。教員間での点数の検討をする時間の短縮ができ、効果がみられた。</p> <p>兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。健康障害を有する小児の事例について紹介し、学生に看護過程を展開させている。学生を5、6名のグループに分けてPBL形式のグループワークを行わせることで、問題の明確化と援助計画立案について主体的に取り組むことができてきた。また、他のグループの学生の前で、実施した看護過程について発表をさせており、プレゼンテーション能力の向上にもつながっている。</p>
9. 離乳食の試食	2009年4月～2015年3月	<p>兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。本演習では、発達段階ごとの離乳食の特徴やその違いについて理解を深めるために、学生が実際に離乳食を試食している。演習後のレポートでは、講義だけでは理解し得ない味や食感を体験できたことで、離乳食についての関心や理解が深まったという記述が多く見られた。</p>
10. 講義の配布資料の工夫	2009年4月～現在	<p>兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護学概論」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）、武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）において実践した。配布資料はパワーポイントのスライドを元に作成し、重要な用語については穴抜きとした。学生は講義を聞きながら穴抜きの箇所を記入しなければならないため、集中力を途切れさせずに講義を聞くことができた。学生は記入する箇所が多過ぎると、記入することはかきこりに集中してしまうため、各スライドに1、2箇所のみ穴抜きとした。学生からは「眠くならず集中できた」というコメントが多くみられた。</p>
11. 視聴覚教材を用いた教育実践	2009年4月～現在	<p>兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護学概論」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）、武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）において実践した。講義では小児の健康障害とその看護について理解することを目的としている。そこで、小児の疾患の症状やそれに対する看護援助の方法について、写真や動画を用いて学生が視覚から理解しやすいうように工夫をして講義を行った。その結果、「講義は写真や動画を見る機会が多く、視覚的に理解がしやすかった」という意見が多数みられた。</p>
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 小児の転倒・転落防止ビデオ	2012年5月	<p>兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。事故防止の講義では、学生が小児の転倒・転落について理解を深め、防止行動がとれるように転倒・転落防止ビデオを作成し、講義で使用している。ビデオは1. 転倒・転落事故の概要について、2. 転落の防止について、3. 転倒の防止について、から構成されている。小児看護学実習では、これまでに学生の受け持ち中の転倒・転落事故は発生していないため、ビデオは学生の理解を高めることに有効であると考えた。</p>
2. 家族支援看護学学内演習要項	2009年4月	<p>兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。学内演習では「小児の身体計測」「小児のバイタルサインの測定」「小児の点滴の固定方法」について行っている。効果的に演習ができるように自己チェック型の演習要項を作成し、ペアの学生同士で適切に実施できているかのチェックを行わせている。学生は事前学習を行ってから演習に臨むことができおり、演習では主体的に取り組むことができてきた。</p>
3. 小児看護学実習要項	2009年10月	<p>兵庫医療大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3、4年次配当、必修2単位）において実践した。学生の実習が円滑に進むために、実習目的、実習目標、実習のスケジュール、実習の展開方法、提出物、記録の様式、から構成される実習要項を作成した。実習要項をもとに実習前にオリエンテーションを行うことで、学生は実習の具体的な展開が理解でき、不安なく実習を進めることができた。また、記録についてももれなく提出することができた。</p>
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 大学院修士課程における副査の担当	2015年4月～現在	<p>武庫川女子大学大学院修士課程において、大学院生2名の研究論文の副査を担当している。</p>
<b>4 その他</b>		
1. 「より良い授業方法の工夫と実践」に取り組む教	2016年8月	<p>平成28年度前期の担当科目「小児看護学Ⅰ」において「</p>

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>4 その他</b>		
員への奨励制度の受賞		より良い授業方法の工夫と実践」に取り組む教員への奨励制度において学長より表彰された。
2. 武庫川女子大学「朝小サマースクール」	2015年8月～現在	講義では自己学習票の持込を可とした看護師国家試験の過去問の小テストを毎回実施しており、復習の習慣づけや国家試験対策に貢献している。
3. 武庫川女子大学 広報入試委員	2015年4月～現在	小学生を対象とした講習会を開講し、手洗いの必要性の教育と手洗い方法の指導、心臓の働きに関する授業を行った。
4. 兵庫医療大学 情報センター運営委員	2014年4月～2015年3月	大学の広報活動および入試業務に関する委員を務めている。
5. 兵庫医療大学 実習部会	2012年4月～2015年3月	大学内の情報管理およびコンピューターの管理に関する委員を務めた。
		看護学部での実習の調整を行う実習部会のメンバーを小児看護学分野代表として務めた。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要

<b>1 資格、免許</b>		
1. 3学会合同呼吸療法認定士資格取得（登録番号：第031052号）	2002年12月	
2. 看護師免許取得（登録番号：第20879号）	1999年3月	

<b>2 特許等</b>		

<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
------------------------------	--	--

1. 高校生への看護学の模擬授業	2015年11月～現在	仁川学院高校、上宮高校、池田高校の生徒へ、大学の看護学部ではどのようなことを学ぶのか、看護学部にはどのような特徴があるのか、看護師の仕事、バイタルサインの意味、バイタルサインの測定方法について模擬授業を行った。
2. 病院に勤務する看護師との共同研究の指導	2014年5月～現在	兵庫医科大学病院の小児病棟に勤務する看護師らとともに共同研究を行った。看護師が現場で問題と感じていることからリサーチクエストを明らかにし、実行可能な調査方法の選択、分析方法、まとめ方の指導を行った。それらの成果については第25回日本小児看護学会学術集会にて「小児病棟に勤務する看護師が摂食障害の患児に陰性感情を抱いた経験とその対処行動」として学会発表を行った。
3. チャイルドケアミーティング	2013年2月～現在	兵庫医科大学病院を主とした阪神間の病院の看護職と兵庫医科大学および武庫川女子大学の教員で、健康障害を有する小児の事例検討および看護職への講義を行っている。
4. 兵庫医療大学 平成23年度「まちの寺子屋師範塾」	2013年12月	子どもの発達・健康・食生活などの子育て支援に関する講座の一環として、家庭で発生しやすい事故とその防止方法について講義を行った。
5. 兵庫医療大学 公開講座「孫育て教室」	2010年10月	祖父母を対象とした公開講座「孫育て教室」にて、家庭での事故防止について講義を行った。
6. 関西子どものケア研究会	2009年3月～2013年2月	関西圏の小児病棟に勤務する看護師と関西圏の大学教員が共同で、健康障害を有する子どもの事例検討を通して、アセスメントの方法や望ましい対応方法についての理解を深めるための検討会を行った。
7. 兵庫県立こども病院 記録委員	2004年4月2006年3月	兵庫県立こども病院において、集中治療室代表として院内の看護記録に関する委員を担当した。
8. 看護学生への臨床実習の指導	1999年4月～2006年3月	兵庫県立こども病院にて看護師として在職していた際には、兵庫県立大学看護学部、兵庫県立総合衛生学院看護学科の学生の小児看護学実習を受け入れ、臨床実習の指導を行った。

<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要

<b>1 著書</b>				

<b>2 学位論文</b>				
---------------	--	--	--	--

1. 入院している小児の転倒・転落防止プログラムの構築	単	2013年3月	大阪大学大学院 医学系研究科博士後期課程 保健学専攻 博士学位論文	入院している小児の転倒・転落を防止するためのプログラムを構築する研究を行った。小児用アセスメントツール作成についての示唆を得るため、小児看護経験が5年以上の看護師52名を対象に3段階のデルファイ法による調査を行い、小児の転倒の危険因子34項目と転落の危険因子34項目を明らかにした。また
-----------------------------	---	---------	-----------------------------------	---

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2 学位論文</b>				
2. 小児看護を实践する看護師の属性および個人特性と職務ストレスおよび離職願望との関連一病棟形態による分析と比較一	単	2008年3月	大阪大学大学院 医学系研究科博士前期課程 保健学専攻, 修士学位論文	、小児が入院する病棟252施設を対象に横断調査を行い、転倒・転落率を低下させる対策や入院環境を明らかにした。これらの結果より、転倒・転落防止プログラムを構築した。 小児看護を实践する看護師の属性や個人特性が、職務ストレスおよび離職願望にどのような影響を与えているかを明らかにするため、27施設の看護師445名を対象に自記式質問紙調査を実施した。240名（小児病棟110名、混合病棟130名）から回答があり、小児病棟と混合病棟のそれぞれにおいて離職願望に影響を与える要因、職務ストレス認知に影響を与える要因について明らかにすることができた。
<b>3 学術論文</b>				
1. 看護師が認識する「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」（査読付き）	単	2016年4月	第46回日本看護学会論文集：看護管理, 46, 353-356	看護師が認識する「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」について明らかにするため、28施設の看護師221名を対象に調査を行った。61名より回答があり、「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」の自由回答を分析した結果、記録単位は117件であった。それらは40のコード、13のサブカテゴリー、5つのカテゴリー「家族からの協力が困難」「システムの不備」「子どもからの協力が困難」「ハード面の不備」「医療者の意識の低さ」に類型化された。
2. 臨地実習指導者経験による看護師の小児看護学実習に対する認識と職務ストレスおよび看護キャリア認知の差異（査読付き）	共	2016年3月	日本看護学教育学会誌, 25(3), 25-35	小児看護学実習を受け入れている病棟の看護師は、臨地実習指導者の経験の有無により、小児看護学実習に対する認識、職務ストレスおよび看護キャリア認知において差異があるかを明らかにするため、調査を行った。825名より回答があり、指導者の経験がある看護師は小児看護学実習に対する認識の『実習を糧とした看護師自身の成長』などの3因子、職務ストレスの『家族への対応』などの6因子、看護キャリア認知の4因子が有意に高得点であった。 本人担当部分：結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤原千恵子、木村涼子、林みずほ、高島遊子、新家一輝、植木慎悟、北尾美香、藤田優二
3. 小児が転倒・転落した際のインシデントレポートの要否に関する看護師の判断（査読付き）	共	2016年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 1, 21-27	看護師は小児が転倒や転落をした際にインシデントレポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査を行った。看護師145名より回答があり、「外傷により処置をした」「外傷により検査をした」場合に必要という回答が多く、「家族のみの状況」よりも「看護師がそばにいた状況」で必要という回答が多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟
4. 専門医療機関の口唇裂・口蓋裂の子どもをもつ母親に対する看護援助の内容とその問題（査読付き）	共	2016年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 1, 53-61	口唇裂・口蓋裂の治療を行っている専門病院での看護経験の豊富な看護師11名の面接調査を行った。母親に対する看護についての語りから、専門医療機関外での看護援助の内容と看護援助をする上で看護師が感じている問題を抽出し、カテゴリー化した。看護師は、専門医療機関内での援助と出向して行う看護援助を多様に実施しており、実施するうえの看護師間の連携や病院組織のシステムに関する問題を認識していることが明らかになった。 本人担当部分：結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤原千恵子、池美保、西尾善子、松中枝理子、藤田優二、新家一輝、高島遊子、植木慎悟、北尾美香、石井京子
5. 成人用ベッドを使用する小児用の転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT第2版および第3版の妥当性の検証（査読付き）	単	2015年6月	兵庫医療大学紀要, 3(1), 25-34	10病棟に入院した成人用ベッドを使用する小児641名に小児用の転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT第2版を使用した。転倒の発生を有意に高めた危険因子は13項目であり、アセスメントツール第2版の感度は0.83、特異度は0.87、AUCは0.91であった。調査結果をもとに改良した第3版では感度1.00、特異度0.49、AUC0.91であった。
6. Paternal postnatal depression in Japan: an investigation of correlated factors including relationship with a partner（査読付き）	共	2015年5月31日	BMC Pregnancy Childbirth 15:128 doi: 10.1186/s12884-015-0552-x.	国内の生後4か月の乳児がいる父親と母親を対象に、産後うつの実態とその影響要因について調査した。807組の両親から回答があり、父親の13.6%、母親の10.3%がうつ状態であり、父親のうつの影響要因としては、夫婦関係の悪さ、不妊治療の経験、精神的な問題による通院歴、経済的不安などが有意に関連していた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
7. 入院児の転倒・転落防止対策：デルファイ法による検討（査読付き）	共	2015年5月	日本看護科学会誌, 35	<p>本人担当部分：データ収集と分析、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：西村明子、藤田優一、勝田真由美、石原あや、大橋一友</p> <p>小児看護を実践する看護師よりコンセンサスの得られた「小児の転倒・転落を防止するために実施すべき対策」について明らかにするため3段階のデルファイ法の調査を行った。90名より回答があり、小児に対しての対策8項目、家族に対しての対策16項目、環境に対しての対策5項目、病棟全体での取り組み6項目の計35項目の防止対策を明らかにした。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、新家一輝</p>
8. 小児看護学実習に対する看護師の認識と影響要因：看護師の認識の因子構造と妥当性（査読付き）	共	2015年3月	大阪大学看護学雑誌, 21(1), 7-13	<p>小児看護学実習を受け入れている病棟の看護師を対象に、実習に対する認識の構造を明らかにするため質問紙調査を行い、833名から回答を得た。実習に対する認識を因子分析した結果、『実習を糧にした看護師自身の成長』『いつも通りにできない負担感』『子どもや家族へのケア効果』『学生の能力や態度に対する困惑感』『学生指導に対する困難感』『学生がもたらす摩擦』の6因子が抽出された。 本人担当部分：結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：木村涼子、藤原千恵子、高島遊子、新家一輝、林みずば、植木慎悟、藤田優一、北尾美香</p>
9. 転倒・転落防止オリエンテーションDVD「入院されるお子様の転倒・転落事故防止に関するお願い」を視聴した家族の意見および転倒・転落防止に関する理解度の変化（査読付き）	単	2014年9月	兵庫医療大学紀要, 2(1), 27-35	<p>小児の家族を対象とした転倒・転落防止オリエンテーションDVDを作成した。入院した小児の家族136名に視聴してもらい81名より質問紙の返送があった。DVDの内容は「分かりやすかった」が60名(74.1%)、「非常に分かりやすかった」が20名(24.7%)であった。DVD視聴後の理解度は、12項目の全てにおいて高くなっていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子</p>
10. 小児用転倒・転落防止プログラムに対する看護師の意見—小児と家族用の転倒・転落防止DVDとパンフレットについて—（査読付き）	共	2014年4月	第44回日本看護学会論文集：看護管理, 44, 173-176	<p>入院している小児の転倒・転落防止プログラム第2版の転倒・転落防止DVDとパンフレットについての改善に向けた課題およびその効果を明らかにすることを目的に、プログラムを実施した看護師252名を対象に調査を行った。103名より回答があり、DVD、パンフレットともに分かりやすいと回答した看護師は95%以上であった。また、転倒・転落の防止に効果があるという回答は8割近くにみられ、看護師からの支持は得られた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、菰野朱美、平山和代、藤原千恵子</p>
11. 産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度への影響要因（査読付き）	共	2014年4月	第44回日本看護学会論文集：母性看護, 44, 34-37	<p>産後4か月の乳児をもつ父親を対象に、夫婦関係満足度の影響要因について調査を行った。735名より回答があり、父親の夫婦関係満足度の平均値は21.4、中央値は22.0であった。夫婦関係満足度を高める影響要因は「母親の夫婦関係満足」「対児感情：接近」「パートナーとの関係のことで相談できる人がいる」など5要因であった。また、「父親の産後うつ」や「対児感情：回避」などの3要因が夫婦関係満足度を低下させる影響要因であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、西村明子、勝田真由美、石原あや、末原紀美代、大橋一友</p>
12. 小児用転倒・転落防止プログラム第2版実施による転倒・転落率の変化および、看護師のプログラムに対する意見（査読付き）	共	2014年12月	小児保健研究, 73(6), 88-894	<p>小児病棟10施設で転倒・転落防止プログラム第2版を実施した。入院した小児3,501名のうち1,338名(38.2%)の小児に6ヵ月間実施し、転倒・転落率は2.06から1.53に有意に低下した。看護師103名よりプログラムに対する意見の回答があり、プログラムの実施により小児と家族への転倒・転落防止の説明が統一されたという回答は82名(79.6%)であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
13. 幼児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第1版の危険因子と転倒・転落との関連およびカットオフポイントの妥当性の検証（査読付き）	共	2014年12月	兵庫医療大学紀要, 2(2), 19-26	不可能 共著者名：藤田優一、藤原千恵子 サークルベッドを使用している幼児104名を調査対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第1版を使用した。危険因子17項目が転倒・転落と有意に関連していた。アセスメントツールの妥当性を示す感度は0.95、特異度は0.47であり、AUC(ROC曲線下面積)は0.76であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
14. サークルベッドを使用する小児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第2版および第3版の妥当性の検証（査読付き）	共	2014年12月	日本看護管理学会誌, 18(2), 125-134	転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版をサークルベッドを使用している幼児697名を調査対象に使用した。アセスメントツール第2版の妥当性を示す感度は0.78、特異度は0.73、AUC(ROC曲線下面積)は0.81であった。調査結果をもとに改良した第3版は感度が0.78、特異度は0.76、AUCは0.83であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
15. 催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の小児について転倒・転落に注意を要する時間の指標—デルファイ法を用いた看護師の判断基準の調査—（査読付き）	共	2013年7月	日本小児看護学会誌, 22(2), 54-60	共著者名：藤田優一、二星淳吾、藤原千恵子 看護師が判断する小児の催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の転倒・転落に注意が必要な時間の指標を明らかにすることを目的として調査を行った。小児看護経験が5年以上の看護師を対象に2回のデルファイ法を実施した。転倒・転落に注意が必要な時間の指標として、トリクロホスナトリウムシロップは3時間、抱水クロラル坐剤3時間、ミダゾラム6時間、チアミラルナトリウム3時間、全身麻酔手術の帰室後は6時間であることが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
16. 入院している小児への転倒防止対策と転落防止対策の実施状況（査読付き）	共	2013年4月	第43回日本看護学会論文集：看護管理, 43, 15-18	共著者名：藤田優一、藤原千恵子 入院している小児への転倒防止対策と転落防止対策について明らかにするため、看護師14名を対象に半構成面接を行った。次に明らかとなった転倒・転落防止対策をもとにアンケートを作成し横断調査を行った。半構成面接では転倒防止対策が14項目、転落防止対策が24項目が明らかとなった。横断調査では252施設より回答があり、転倒防止対策30項目、転落防止対策36項目とその実施状況が明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
17. 小児用転倒・転落リスクアセスメントツール28件の分析（査読付き）	単	2013年3月	兵庫医療大学紀要, 1(1), 35-45	共著者名：藤田優一、藤原千恵子 全国の病院で使用されている小児用の転倒・転落リスクアセスメントツール28件の危険因子および使用方法について明らかにすることを目的として調査を行った。危険度が3段階のアセスメントツールのカットオフポイントの平均は危険度Ⅱが8.1点（最大得点の20.6%）、危険度Ⅲが17.1点（最大得点の40.6%）であった。28件の危険因子を分類した結果、明らかとなった危険因子は114項目、20カテゴリーであった。
18. 入院している小児のサークルベッドからの転落に関する危険因子—デルファイ法による調査—（査読付き）	共	2013年3月	日本小児看護学会誌, 22(1), 32-39	入院している小児のサークルベッドからの転落の危険因子について明らかにすることを目的として、小児看護経験が5年以上の看護師を対象に3段階のデルファイ法による調査を実施した。第1段階は看護師14名に半構成面接を行った。第2段階は看護師65名、第3段階では52名に対して質問紙調査を行った。明らかとなった転落の危険因子は、年齢・発達6項目、性別1項目、性格・パーソナリティ10項目、疾患・症状・治療4項目、付き添い者の状況9項目、入院環境4項目の計34項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
19. Pediatric falls: effect of prevention measures and characteristics of pediatric wards（査読付き）	共	2013年12月	Japan Journal of Nursing Science, 10(2), 223-231	共著者名：藤田優一、藤原千恵子 入院している小児の転倒・転落の影響要因を明らかにすることを目的として、小児が入院する病院603施設を対象に調査を行った。252施設より回答があり、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
読付き)				
20. 小児との混合病棟に入院する成人患者の転倒・転落と入院環境との関連 (査読付き)	共	2012年3月	第42回日本看護学会論文集:成人看護 I, 42, 196-199	<p>転倒・転落率は平均1.36 (1000 patient days)であった。転倒・転落率を低下させる影響要因として、平均在院日数が長いこと、転倒・転落ハイリスク患者の情報共有の実施、新人看護師の研修の回数が多いこと、患者家族へのパンフレットを用いたベッド柵の取り扱いについての説明などが明らかとなった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優二、藤田真由子、藤原千恵子</p>
21. 小児の転倒・転落リスクアセスメントツールの使用状況とその効果 (査読付き)	共	2012年2月	日本看護学会論文集：小児看護, 42, 80-83	<p>小児に対するアセスメントツールの使用状況と転倒・転落率との関連について調査を行った。136施設の小児病棟から回答があり、成人患者の転倒・転落率の平均は1.06 (1,000 患者日)であった。看護師1人あたりの病床数が多い施設では転倒・転落率が高かった。病棟内にプレイルームがある施設では転倒・転落率が低かった。小児患者と成人患者で一定期間担当チームを分けている施設では転倒・転落率が低かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優二、藤原千恵子</p>
22. 入院する小児のベッド選択基準の現状および転倒・転落率との関連—総合病院252施設における調査— (査読付き)	共	2012年11月	日本小児看護学会誌, 21(3), 37-43	<p>小児に対するアセスメントツールの使用状況と転倒・転落率との関連について調査した。252施設から回答があり、小児にアセスメントツールを使用している施設は75.4%であったが、アセスメントツールの種類は小児専用が39.5%、成人と共通が60.5%であった。転落率はアセスメントツールを使用している施設で有意に低かったが、種類別では成人と共通のアセスメントツールを使用している施設の方が転落率は低かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優二、藤原千恵子</p>
23. 全国の総合病院における小児の入院環境の実態調査 (査読付き)	共	2012年11月	小児保健研究, 71(6), 883-889	<p>小児が入院する際の、サークルベッドと成人用ベッドの選択基準の現状を明らかにし、選択基準と転倒・転落率との関連を検討した。252施設から回答があり、成人用ベッドを使用し始める年齢は「3歳以上4歳未満」(26.4%)と「4歳以上5歳未満」(28.2%)が多かった。成人用ベッドを使用し始める年齢が4歳未満の施設と4歳以上の施設で転倒・転落率を比較すると、4歳以上の施設で転倒・転落率が高かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優二、藤原千恵子</p>
24. 成人との混合病棟における小児看護に関する国内文献の検討 (査読付き)	共	2011年7月	小児看護, 34(7), 918-924	<p>小児の入院環境が先行研究と比較してどのように変化しているかを調査した。総合病院603施設を対象に横断調査を行い、252施設(回収率41.8%)より回答があった。プレイルームがある施設は小児病棟113施設(97.4%)、混合病棟108施設(79.4%)であった。院内学級の設置は小児病棟59施設(50.9%)、混合病棟38施設(27.9%)、保育士の配置は小児病棟71施設(61.2%)、混合病棟33施設(24.3%)であり、10年前の調査と比較して設置率、配置率は高くなっていた。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優二、石原あや、藤井真理子、藤原千恵子</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
25. 小児看護を実践する看護師の属性、個人特性、職務ストレスが離職願望に与える影響—小児病棟と成人との混合病棟での分析と比較— (査読付き)	共	2011年6月	日本看護研究学会雑誌, 33(2), 85-94	担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤井真理子、石原あや 小児看護を実践する看護師240名を対象として、属性、個人特性、職務ストレスが離職願望に与える影響を明らかにすることを目的として調査を行った。小児病棟では、離職願望に対して家族同室割合は負の関連があり、夜勤回数、職務ストレス認知の「看護師間の人間関係」、コーピング特性の「回避と抑制」は正の関連がみられた。混合病棟では、離職願望に対して小児看護経験年数、ホープ特性は負の関連があり、職務ストレス認知の「業務量」は正の関連がみられた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
26. 成人との混合病棟で小児看護を実践する看護師の職務ストレス—小児患者割合別の比較— (査読付き)	単	2011年4月	第40回日本看護学会論文集：看護管理, 40, 312-314	共著者名：藤田優二、藤原千恵子 小児と成人の混合病棟の15施設に勤務する看護師130名を対象に、職務ストレス認知について調査した。小児患者主体の病棟の看護師(72名)と成人患者主体の病棟の看護師(58名)とで比較検討した。「難しい対象への関わり」と「看護師間の人間関係」の職務ストレス認知が小児主体群で有意に高く、「子どもに適した設備・備品」の職務ストレス認知が成人主体群で有意に高かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
27. 小児看護を実践する看護師の属性と個人特性が職務ストレス認知に与える影響—小児病棟と成人との混合病棟での分析と比較— (査読付き)	共	2010年3月	日本小児看護学会誌, 19(1), 80-87	共著者名：藤田優二、藤原千恵子 小児看護を実践する看護師の職務ストレス認知に与える影響について明らかにするため、240名(小児病棟110名、混合病棟130名)を対象に調査を行った。小児病棟では「医師との関係」の職務ストレス認知にホープ特性が影響を与えており、「看護師間の人間関係」などの複数の職務ストレス認知に夜勤回数が影響を与えていた。混合病棟では「子どもとの関わり」「業務量」などの職務ストレス認知にコーピング特性が影響を与えていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
28. 夜勤形態による小児看護を実践する看護師の職務ストレス認知の違い (査読付き)	共	2009年4月	第39回日本看護学会論文集：看護管理, 39, 321-323	共著者名：藤田優二、藤原千恵子 小児看護に携わる看護師238名を対象に小児看護師の職務ストレス尺度による調査を行い、病棟形態ごとに夜勤形態別(2交代と3交代)の比較を行った。小児病棟では2交代群で2項目の職務ストレス認知が有意に低く、3交代群で1項目が有意に低かった。混合病棟では2交代群で3項目の職務ストレス認知が有意に低かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. リスク・ベネフィットのバランスを評価した看護実践への挑戦 小児と高齢者看護のベストプラクティス	共	2014年12月	第34回日本看護科学学会学術集会交流セッション (名古屋)	臨床実践でリスクの高い小児病棟での転倒・転落予防と高齢者施設における誤嚥性肺炎の予防に焦点をあて、ベネフィットとリスクとのバランスについて考察し、参加者と活発なディスカッションを通して、リスク・ベネフィットに関するエビデンスについて情報交換を行った。 共同発表者：山川みやえ、藤田優二、山田正己、伊藤美樹子、心光世津子、樋上容子、植木慎悟、山田絵里、渡邊浩子、牧本清子
2. 入院している小児の転倒・転落防止に向けた取り組み	共	2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会テーマセッション (盛岡)	「小児患者用の転倒・転落リスクアセスメントツールの実用化にむけて」 小児のアセスメントツールの使用状況と、作成手順について話題提供を行った。 共同発表者：藤田優二、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子
<b>2. 学会発表</b>				
1. The Prevalence of Fall-Risk Personality Traits Among Hospitalized Children Using Crib	共	2016年3月	19th EAFONS (千葉)	小児の転倒・転落の危険因子のうち「危険の理解ができない」「行動が突発的で激しい」「親の言うことを聞かない」「親への後追いをする」の4つは転倒



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
2. The Inter-rater Reliability of the Child-Fall Risk Assessment Tool for Pediatric Patients Using a Crib	共	2016年3月	19th EAFONS (千葉市)	<p>・転落の発生と有意に関連している。537名の小児を対象にこれらの性格の月齢、年齢別の該当率を調査した。「危険の理解ができない」は6か月から2歳までは90%以上が該当していた。「行動が突発的で激しい」は、1～1歳6か月が68%と最も高かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟</p> <p>サークルベッドを使用する小児用の転倒・転落リスクアセスメントツールの看護師間での信頼性を検証するために調査を行った。13名の看護師が2名同時に患児54名のアセスメントを行った。評価者間の信頼性を示すカッパ係数は「点滴スタンドを押しながら歩行する (1.0)」「男児 (0.96)」などが高かった。アセスメント結果のカッパ係数は0.85と高かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟</p>
3. 看護師が認識する「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」、第46回日本看護学会抄録集	単	2015年9月9日	第46回日本看護学会抄録集：看護管理 (福岡市)	<p>看護師が認識する「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」について明らかにするため自記式質問紙調査を行い、61名より回答があった。内容分析で分析した結果、40のコードがあり、「家族からの協力が困難」「システムの不備」「子どもからの協力が困難」「ハード面の不備」「医療者の意識の低さ」の5つのカテゴリーに分類できた。</p>
4. 小児病棟に勤務する看護師が摂食障害の患児に陰性感情を抱いた経験とその対処行動	共	2015年7月25日	日本小児看護学会第25回学術集会 (千葉市)	<p>小児病棟の看護師22名を対象に、摂食障害の患児と関わる中で陰性感情を抱いた経験とその対処行動について明らかにすることを目的として調査を行った。陰性感情を抱いた具体的な場面は、「患児が食事を捨てていたことが発覚した時」、「患児が無断で病棟外へ出た時」などがみられた。対処行動としては「他の医療従事者に伝えた」「主治医に報告した」などがみられた 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：湯浅真裕美、藤田優二、石原あや、藤井真理子</p>
5. 入院児が歩行中に転倒した際のインシデントレポート報告の要否に関する看護師の判断	共	2015年12月5日	第35回日本看護科学学会学術集会抄録集 (広島市)	<p>看護師は小児が転倒をした際にインシデントレポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査をおこなった。看護師145名より回答があり、「外傷により処置をした」「外傷により検査をした」場合に必要という回答が多く、「家族のみの状況」よりも「看護師がそばにいた状況」で必要という回答が多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟</p>
6. 入院児が歩行中に転倒した際のインシデントレポート報告の要否に関する看護師の判断	単	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会 (広島市)	<p>看護師は小児が転倒をした際にインシデントレポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査をおこなった。看護師145名より回答があり、「外傷により処置をした」「外傷により検査をした」場合に必要という回答が多く、「家族のみの状況」よりも「看護師がそばにいた状況」で必要という回答が多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟</p>
7. 口唇裂・口蓋裂の専門医療機関における母親への看護実践の質的分析—看護師の実践とそれを支える要因—	共	2015年11月7日	第46回日本看護学会抄録集：ヘルスプロモーション (富山市) p217	<p>口唇裂・口蓋裂の専門病院の経験豊かな看護師11名を対象とした面接調査を質的記述的分析を行い、看護実践の内容と実践する上で認識している問題を明らかにした。 本人担当部分：結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤原千恵子、松中枝理子、池美保、西尾善子、新家一輝、高島遊子、植木慎悟、藤田優二、北尾美香、石井京子</p>
8. Are All Falls Involving Hospit	単	2014年9月	Asia-Pacific Nursing	<p>看護師は小児が転倒・転落をした際にインシデント</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
alized Children Filed as "Incident Reports"?			Research Conference2014 (台湾, 台北)	レポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査をおこなった。看護師46名より回答があり、インシデントレポートの報告率は、転倒が56%、ベッドからの転落は80%であり有意差がみられた。また、外傷がない場合では転倒よりもベッドからの転落で多くインシデントレポートが報告される傾向がみられた。
9. 成人用ベッドを使用する小児用の転倒リスクアセスメントツール第3版の妥当性の検討	共	2014年8月	第18回日本看護管理学会学術集会(松山市)	成人ベッドを使用している小児641名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版を使用した。その結果をもとに改良したアセスメントツール第3版を作成し、第2版のデータを適応させた。成人ベッド用アセスメントツール第3版の妥当性を示す感度は1.00、特異度は0.49、AUCは0.91であった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子
10. サークルベッドを使用する小児用転倒・転落リスクアセスメントツール第3版の妥当性の検討	共	2014年8月	第18回日本看護管理学会学術集会(松山市)	サークルベッドを使用している幼児697名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版を使用した。その結果をもとに改良したアセスメントツール第3版を作成し、第2版のデータを適応させた。サークルベッド用アセスメントツール第3版の妥当性を示す感度は0.78、特異度は0.76、AUCは0.83であった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子
11. 成人用ベッドを使用する小児用の転倒リスクアセスメントツール第3版の妥当性の検討	共	2014年8月	第18回日本看護管理学会学術集会(松山市)	成人ベッドを使用している小児641名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版を使用した。その結果をもとに改良したアセスメントツール第3版を作成し、第2版のデータを適応させた。成人ベッド用アセスメントツール第3版の妥当性を示す感度は1.00、特異度は0.49、AUCは0.91であった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子
12. Validation of the Second Edition of the Child-Fall Risk Assessment Tool for Pediatric Patients Using Adult-sized Beds	単	2014年7月	Pediatric Nursing 30th Annual Conference (アメリカ合衆国、ワシントンDC)	成人用ベッドを使用する小児患者用の転倒・転落リスクアセスメントツール第2版の妥当性を明らかにするために、2012年10月から2013年3月にかけて10病棟に入院した成人用ベッドを使用する小児641名を対象に前向きコホート調査を行った。アセスメント回数は計1,094回であり、アセスメントツールの感度は0.92、特異度は0.75、ROC曲線下面積は0.91であった。
13. Validation of the Second Edition of the Child-Fall Risk Assessment Tool for Pediatric Patients Using Cribs	単	2014年7月	Pediatric Nursing 30th Annual Conference (アメリカ合衆国、ワシントンDC)	サークルベッドを使用する小児患者用の転倒・転落リスクアセスメントツール第2版の妥当性を明らかにするために、2012年10月から2013年3月にかけて10病棟に入院したサークルベッドを使用する小児697名を対象に前向きコホート調査を行った。アセスメント回数は計1,315回であり、アセスメントツールの感度は0.78、特異度は0.73、ROC曲線下面積は0.81であった。
14. 入院児の転倒・転落防止対策：デルファイ法による検討	共	2014年12月	第34回日本看護科学学会学術集会(名古屋)	小児看護を実践する看護師よりコンセンサスの得られた「小児の転倒・転落を防止するために実施すべき対策」について明らかにするため3段階のデルファイ法の調査を行った。90名より回答があり、小児に対する対策8項目、家族に対する対策16項目、環境に対する対策5項目、病棟全体での取り組み6項目の計35項目の対策を明らかにした。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、新家一輝
15. デルファイ法の参加者数に関する検討	共	2014年12月	第34回日本看護科学学会学術集会(名古屋)	デルファイ法の適切な参加者数について検討するため調査を行った。3段階のデルファイ法を実施し、結果の一致度を算出した。その結果、参加者数が18名以上であれば中等度以上の一致度を示していたことから、参加者数は18名以上でデルファイ法の結果の質は保証されることが示唆された。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、新家一輝

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
16. 小児用転倒・転落防止プログラム第2版に対する看護師の意見—小児と家族用の転倒・転落防止DVDとパンフレットについて—	共	2013年9月	第44回日本看護学会： 小児看護（宇都宮市）	入院している小児の転倒・転落防止プログラム第2版の転倒・転落リスクアセスメントツールC-FRATの改善に向けた課題およびその効果を明らかにすることを目的に、プログラムを実施した看護師252名を対象に調査を行った。103名より回答があり、アセスメントツールの予測精度は高いと回答した看護師は51.4%であった。また、アセスメントツールは使いやすいとの回答は60.8%、転倒・転落の防止に有効という回答は63.5%であった。 本人担当部分：データ収集、分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、菰野朱美、平山和代、藤原千恵子
17. 産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度に関連する要因	共	2013年9月	第44回日本看護学会： 母性看護（岡山市）	産後4か月の乳児をもつ父親を対象に、夫婦関係満足度に関連する要因について調査を行った。735名より回答があり、父親の夫婦関係満足得点の平均値は21.4、中央値は22.0であった。夫婦関係満足得点と有意な正の相関がみられた要因は、「対児感情：接近」などの3項目であった。有意な負の相関は「仕事のストレス」などの2項目であった。夫婦関係満足得点が有意に高かった要因として「パートナーとの関係のことで相談できる人」がいる、「父親の産後うつ状態」など10項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、西村明子、勝田真由美、石原あや、末原紀美代、大橋一友
18. 成人ベッド・学童ベッド用転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT 2第2版の危険因子と転倒発生との関連	共	2013年7月	日本小児看護学会第23 回学術集会（高知市）	成人ベッド・学童ベッドを使用する小児298名を対象として、転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT2第2版の危険因子と転倒発生との関連について調査した。アセスメント回数は計517回であり、「転倒または転倒の危険」の有無と危険因子の有無の関連をフィッシャーの正確確率検定にて分析し、「下肢の筋力低下」や「睡眠剤の使用」など12項目の危険因子に有意な関連がみられた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果 共同発表者：湯浅真裕美、藤田優一、二星淳吾、藤原千恵子
19. 入院している小児の転倒・転落防止対策における家族自己チェックの実施状況		2013年7月	日本小児看護学会第22 回学術集会（高知市）	アセスメントツール：C-FRAT1第2版を用いて、転倒・転落防止対策の家族の実施状況について明らかにした。サークルベッドを使用する小児の家族342名を対象とし、転倒・転落防止対策の実施の有無について家族が自己チェックを行った。アセスメント回数は計623回であり、家族が転倒・転落防止対策を実施できていない割合は、「ベッドの上の整理整頓がされていないことがある」、「ベッド周囲の整理整頓がされていないことがある」が多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子
20. サークルベッド用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT1 第2版の危険因子と転倒・転落発生との関連	共	2013年7月	日本小児看護学会第22 回学術集会（高知市）	サークルベッドを使用する小児342名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT1第2版の危険因子と転倒・転落発生との関連について調査した。アセスメント回数は計623回であり、「転倒・転落または転倒・転落の危険」の有無と危険因子の有無の関連をカイ2乗検定にて分析し、「身体症状が改善して活気が出てきた」や「行動が突発的で激しい」など12項目の危険因子と有意な関連がみられた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果 共同発表者：二星淳吾、藤田優一、湯浅真裕美、藤原千恵子
21. 小児用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRATのROC曲線を用いたカットオフポイントの検討	共	2013年3月	日本看護研究学会第26 回近畿・北陸地方会学 術集会（和歌山市）	小児用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第1版の適正なカットオフポイントについて明らかにするため、幼児90名と、学童64名を調査対象として前向きコホート調査を実施した。当初は先行研究の結果よりカットオフポイントは最大得点の40%となる値に設定した（幼児用16点、学童用13点）。しかし、調査の結果、感度・特異度が最も高くなるカットオフポイントは、「幼児用」が13点（最大得点の32.5%）、「学童用」が6点（最大得点の17.6%）であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子
22. 小児の催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の転倒・転落に必要な	共	2013年3月	日本看護研究学会第26 回近畿・北陸地方会学	催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の転倒・転落に注意が必要な時間の指標を明らかにするため、小児看護

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
時間の指標：デルファイ法による調査			術集会（和歌山市）	経験が5年以上の看護師52名を対象に2段階のデルファイ法を実施した。薬剤使用後の転倒・転落に注意すべき時間は、トリクロホスナトリウムシロップ3時間、抱水クロラール坐剤3時間、ミダゾラム6時間、チアミラールナトリウム4時間、全身麻酔手術の術室後6時間であり、これらを薬剤の投与後に転倒・転落に注意すべき時間の指標とした。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子
23. 産後4か月の母親と父親のうつ状態の関連	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会（大阪市）	産後4か月の母親と父親のうつ状態の有病率との関連を明らかにするためエジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた調査を行った。735組の夫婦より回答があった（回収率37.1%）。うつ状態の母親は69名（9.8%）、父親103名（14.7%）であった。母親と父親の両方がうつ状態である夫婦が21組（3.0%）であり、母親と父親のうつ状態に関連がみとめられた。そのため、産後うつ病の支援は母親だけでなく夫婦をひとつの単位として支援していく必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集と分析、結果 共同発表者：西村明子、藤田優一、石原あや、勝田真由美、大橋一友
24. 小児用転倒・転落防止プログラム第2版のアウトカム	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会（大阪市）	入院児の転倒・転落防止プログラム第2版のアウトカムを明らかにするため、プログラム実施前と実施中の転倒率および転落率の変化およびプログラムに対する看護師の意見について調査した。看護師103名より回答があり、「家族の転倒・転落防止の理解に効果がある」は86名（83.5%）とプログラムの実施は概ね効果があると支持されていた。10病棟に入院した小児は計3,501名であり、転倒率は実施前と実施中で有意差がなかったものの、転落率は実施中に有意に低下した。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子
25. The relation between falls and preventive measures implemented by parents of pediatric patients	単	2013年10月	The 3rd World Academy of Nursing Science（韓国, ソウル）	サークルベッドを使用する小児患者697名を対象に、転倒・転落発生の有無と家族の転倒・転落防止対策実施の有無との関連について調査を行った。家族の自己チェックは計430回であった。家族が実施した対策のうち転倒・転落発生と有意な関連がみられたものは「小児が廊下や病室を走っている時に走らないように注意する」「スリッパではなく、滑りにくい靴を履かせる」「ベッドから離れる時は、ベッド柵を上げる」などであった。
26. Risk factors of Japanese mother's depression	共	2013年10月	The 3rd World Academy of Nursing Science（韓国, ソウル）	産後4か月の乳児をもつ母親を対象に、産後うつに影響を与える要因について調査を行った。産後うつの評価はエジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた。735名の夫婦より回答があり、そのうち母親73名（10.1%）、父親103名（14.4%）が産後うつと判定された。母親の産後うつに影響を与える要因は「パートナーのことに相対できる人がいないこと」「夫の産後うつ状態」「対人感情：回避」「精神病の既往」「低い夫婦関係満足」であった。 本人担当部分：データ分析、結果 共同発表者：西村明子、藤田優一、石原あや、勝田真由美、大橋一友
27. 入院している幼児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRATの危険因子と転倒・転落との関連	共	2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（盛岡市）	幼児90名を対象に、幼児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT（Children Fall Risk Assessment Tools）の危険因子と転倒・転落との関連について、前向きコホート調査にて検証した。転倒・転落は6件、転倒・転落の危険があったのは10件の計16件であった。「転倒・転落の有無および転倒・転落の危険の有無」と関連がみられた危険因子は「男の子」「2～3歳」などの12項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、斎藤富美代、藤原千恵子
28. 入院している学童用の転倒リスクアセスメントツール：C-FRATの危険因子と転倒・転落との関連	共	2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（盛岡市）	学童66名を調査対象として、学童用の転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT第1版の危険因子と転倒との関連について、前向きコホート調査にて検証した。入院中に1回でもハイリスクとなった小児は6名（9.1%）であった。転倒は0件、転倒の危険があったのは9件であった。「転倒の有無および転倒の危険の有無」と関連がみられた危険因子は「下肢の筋力低下」「下肢のリハビリテーション中」など9項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
29. 入院している小児と家族用の転倒・転落防止オリエンテーションDVDの有効性		2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（盛岡市）	共同発表者：二星淳吾、藤田優一、湯浅真裕美、斎藤富美代、藤原千恵子 入院している小児とその家族が転倒・転落防止について理解するための転倒・転落防止オリエンテーションDVD（以下、DVD）を作成し、その有効性についてアンケート調査を行った。小児の家族74名から回答があり、「分かりやすかった」が75.6%で最も多かった。転倒・転落防止に関する注意事項12項目は、DVD視聴後に理解度が有意に高くなっていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果
30. 小児が入院する際のベッド選択基準の現状	共	2012年3月	日本看護研究学会第25回近畿・北陸地方会学術集会（吹田市）	共同発表者：湯浅真裕美、藤田優一、二星淳吾、斎藤富美代、藤原千恵子 小児が入院する際の、サークルベッドと成人用ベッドの選択基準の現状を調査した。252施設から回答があり、成人用ベッドを使用し始める年齢は「3歳以上4歳未満」（26.4%）と「4歳以上5歳未満」（28.2%）が多かった。年齢以外の基準として、発達（40.4%）、身長・体格（33.1%）、疾患・病状（13.2%）によりベッドが選択されていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察
31. 入院している小児の転倒の危険因子：デルファイ法による調査	共	2012年3月	日本看護研究学会第25回近畿・北陸地方会学術集会（吹田市）	共同発表者：藤田優一、藤原千恵子 入院している小児の転倒の危険因子について明らかにすることを目的として、小児看護経験が5年以上の看護師を対象に3段階のデルファイ法による調査を実施した。第1段階は看護師14名に半構成面接を行った。第2段階は看護師65名、第3段階では52名に対して質問紙調査を行った。明らかとなった転倒の危険因子は、年齢・発達4項目、性別1項目、性格・パーソナリティ9項目、疾患・症状・治療13項目、付き添い者の状況5項目、入院環境2項目の計34項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察
32. 入院している小児への転倒防止対策と転落防止対策の実施状況	共	2012年10月	第43回日本看護学会学術集会：看護管理（京都市）	共同発表者：藤田優一、藤原千恵子 入院している小児への転倒防止対策と転落防止対策について明らかにするため、看護師14名を対象に半構成面接を行った。次に明らかとなった転倒・転落防止対策をもとにアンケートを作成し、対策の実施状況を調査するため総合病院603施設を対象に横断調査を行った。半構成面接では転倒防止対策が14項目、転落防止対策が24項目が明らかとなった。横断調査は252施設より回答があり、転倒防止対策が30項目、転落防止対策は36項目が明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察
33. 小児との混合病棟に入院する成人患者の転倒・転落と入院環境との関連	共	2011年9月	第42回日本看護学会：成人看護Ⅰ（大阪市）	共同発表者：藤田優一、藤原千恵子 小児との混合病棟に入院する成人患者の転倒・転落と入院環境との関連について調査を行った。136施設の混合病棟から回答があり、成人患者の転倒・転落率の平均は1.06（1,000患者日）であった。看護師1人あたりの病床数が多い施設では転倒・転落率が高かった。病棟内にプレイルームがある施設では転倒・転落率が低かった。小児患者と成人患者で一定期間担当チームを分けている施設では転倒・転落率が低かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察
34. 入院している小児の転倒・転落の影響要因	共	2011年8月	日本看護研究学会第37回学術集会（横浜市）	共同発表者：藤田優一、藤原千恵子 入院している小児の転倒・転落の影響要因を明らかにすることを目的として、小児が入院する病院603施設を対象に調査を行った。252施設より回答があり、転倒・転落率は平均1.36（1000 patient days）であった。転倒・転落率を低下させる影響要因として、平均在院日数が長いこと、転倒・転落ハイリスク患者の情報共有の実施、新人看護師の研修の回数が多いこと、患者家族へのパンフレットを用いたベッド柵の取り扱いについての説明などが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察
35. 小児の転倒・転落リスクアセスメントツールの使用状況とその効果	共	2011年8月	第42回日本看護学会学術集会：小児看護（東京都文京区）	共同発表者：藤田優一、藤原千恵子 小児に対するアセスメントツールの使用状況と転倒・転落率との関連について明らかにすることを目的として調査を行った。252施設の混合病棟から回答があり、小児にアセスメントツールを使用している施設は75.4%であったが、アセスメントツールの種類は小児専用が39.5%、成人と共通が60.5%であった

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
36. 総合病院における小児の入院環境—小児病棟と成人との混合病棟での比較—	共	2011年7月	日本小児看護学会第21回学術集会（さいたま市）	<p>。転落率はアセスメントツールを使用している施設で有意に低かったが、種類別では成人と共通のアセスメントツールを使用している施設の方が転落率は低かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優二、藤原千恵子</p> <p>全国の総合病院における小児の入院環境の実態を調査した。252施設より回答があり、小児病棟は116施設（46.0%）、混合病棟は136施設（54.0%）であった。小児病棟と混合病棟で有意差のあった項目は、総病床数、病床数、病床稼働率、平均在院日数とプレイルーム、学習室、院内学級、保育士の配置の有無であった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優二、石原あや、藤井真理子、藤原千恵子</p>
37. 総合病院における小児の家族の付添いと面会の状況—小児病棟と成人との混合病棟での比較—	共	2011年7月	日本小児看護学会第21回学術集会（さいたま市）	<p>全国の総合病院における小児の家族の付添いと面会の状況の実態について調査した。252施設より回答があり、小児病棟は116施設（46.0%）、混合病棟は136施設（54.0%）であった。小児病棟と混合病棟で有意差のあった項目は、付添い基準、面会の人数制限の有無、面会の年齢制限の有無とその年齢、付添いの割合であった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：石原あや、藤田優二、藤井真理子、藤原千恵子</p>
38. 入院している小児の転落の危険因子：デルファイ法による調査	共	2011年12月	第31回日本看護科学学会学術集会（高知市）	<p>入院している小児のサークルベッドからの転落の危険因子について明らかにすることを目的として、小児看護経験が5年以上の看護師を対象に3段階のデルファイ法による調査を実施した。第1段階は看護師14名に半構成面接を行った。第2段階は看護師65名、第3段階では52名に対して質問紙調査を行った。明らかとなった転落の危険因子は、年齢・発達6項目、性別1項目、性格・パーソナリティ10項目、疾患・症状・治療4項目、付き添い者の状況9項目、入院環境4項目の計34項目であった</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優二、藤原千恵子</p>
39. 成人との混合病棟における小児看護に関する文献検討	共	2010年8月	日本小児看護学会第20回学術集会（神戸市）	<p>成人と小児の混合病棟で実践されている小児看護の現状と問題点、および今後の課題を文献検討により明らかにすることを目的として調査を行った。対象文献は27件であり、混合病棟の入院環境に関する文献は6件、成人患者との関係に関する文献は6件、混合病棟の看護師の特性に関する文献は15件であった。小児病棟から混合病棟に移行した施設の看護師を対象とした縦断的研究、混合病棟への介入研究はされておらず、今後の課題が明らかとなった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優二、藤原千恵子</p>
40. 成人との混合病棟で小児看護を実践する看護師の職務ストレス—小児患者割合別での比較—	共	2009年10月	第40回日本看護学会学術集会：看護管理（大阪市）	<p>小児と成人の混合病棟の15施設に勤務する看護師130名を対象に、職務ストレス認知について調査した。小児患者主体の病棟の看護師（72名）と成人患者主体の病棟の看護師（58名）とで比較検討した。「難しい対象への関わり」と「看護師間の人間関係」の職務ストレス認知が小児主体群で有意に高く、「子どもに適した設備・備品」の職務ストレス認知が成人主体群で有意に高かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優二、藤原千恵子</p>
41. 小児看護を実践する看護師の属性および個人特性と離職願望との関連—病棟形態による分析と比較—	共	2008年8月	第34回日本看護研究学会学術集会（神戸市）	<p>小児看護を実践する看護師240名を対象として、属性、個人特性、職務ストレスが離職願望に与える影響を明らかにすることを目的として調査を行った。小児病棟では、離職願望に対して家族同室割合は負の関連があり、夜勤回数、職務ストレス認知の「看護師間の人間関係」、コーピング特性の「回避と抑制」は正の関連がみられた。混合病棟では、離職願望に対して小児看護経験年数、ホープ特性は負の関連があり、職務ストレス認知の「業務量」は正の関連がみられた。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優二、藤原千恵子</p>
42. 小児看護を実践する看護師の属性	共	2008年7月	日本小児看護学会第18	小児看護を実践する看護師の職務ストレス認知に与

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
および 個人特性と職務ストレスとの関連一病棟形態による分析と比較-			回学術集会 (名古屋)	える影響について明らかにするため、240名(小児病棟110名、混合病棟130名)を対象に調査を行った。小児病棟では「医師との関係」の職務ストレス認知にホープ特性が影響を与えており、「看護師間の人間関係」などの複数の職務ストレス認知に夜勤回数が影響を与えていた。混合病棟では「子どもとの関わり」「業務量」などの職務ストレス認知にコーピング特性が影響を与えていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子
43. 夜勤形態による小児看護を実践する看護師の職務ストレス認知の違い-病棟形態ごとの比較-	共	2008年10月	第39回日本看護学会学術集会：看護管理(熊本市)	小児看護に携わる看護師238名を対象に小児看護師の職務ストレス尺度による調査を行い、病棟形態ごとに夜勤形態別(2交代と3交代)の比較を行った。小児病棟では2交代群で2項目の職務ストレス認知が有意に低く、3交代群で1項目が有意に低かった。混合病棟では2交代群で3項目の職務ストレス認知が有意に低かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子
<b>3. 総説</b>				
1. 入院している小児の転倒・転落に関する文献検討	単	2013年12月	兵庫医療大学紀要, 1(2), 3~14	入院している小児の転倒・転落に関する文献検討を行い、研究の現状と今後の課題を明らかにするため、国内の文献54件、国外の文献13件の計67件を分析した。転倒・転落防止を説明するためのパンフレットやDVD、アセスメントツールに関する研究が多く報告されていた。しかし、国内の文献では転倒・転落率が統一されておらず、アウトカムが十分に検証されていない現状がみられた。今後の課題としては、小児の転倒・転落に関するインシデントの報告基準の明確化と、転倒率、転落率の統一化であることが明らかとなった。
<b>4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 科学研究費補助金「基盤研究C」	共	2016年4月～現在	テーマ：「小児科外来における看護実践の暗黙知の解明とSECIモデルを活用した学習方法の検証」助成金：4,550千円	小児科外来の看護師が暗黙的に実践している「診療や看護をスムーズにさせるための知識・技術」を、知識変換の過程であるSECIモデルを用いて形式知へ変換し、学習用の動画とパンフレットを作成して外来看護師へ講習を行い、その効果を検証する。現在は、アンケート調査によって、小児科外来の現状の調査を行なっている。 共同研究者：藤田優一(研究代表者)、藤原千恵子、植木慎悟、北尾美香
2. 科学研究費補助金「基盤研究C」	共	2014年4月～現在	テーマ：「口唇口蓋裂児の親のレジリエンスの解明と育児困難への前向き育児プログラムによる介入」助成金：4,680千円	口唇口蓋裂をもつ子どもの親を対象に、育児レジリエンスと困難感に関する質問紙調査を現在実施している。今後は、育児の困難な親に対するトリプルP講習会を開催し、その有効性を検証する予定である。 本人担当部分：データ収集、分析 共同研究者：藤原千恵子(研究代表者)、藤田優一、宮野遊子、新家一輝
3. 科学研究費補助金「学術研究助成」(若手研究B)	単	2012年4月～2015年3月	テーマ：「入院している小児の転倒・転落防止プログラム改訂版の作成とその効果の検証」助成金：4,160千円	転倒・転落リスクアセスメントツールの使用と、DVD・パンフレットによるオリエンテーション、リスクに応じた対策から構成される転倒・転落防止プログラム第2版を平成24～25年に10病棟の入院児1,338名に実施した。サークルベッド用アセスメントツール第2版は、転倒・転落の発生を有意に高めた危険因子は15項目であった。予測精度であるAUCは0.81、感度は0.78、特異度は0.73であった。第2版の結果をもとに作成した第3版のAUCは0.83～0.84であった。プログラムの実施以前とプログラムの実施中の6か月間の転倒・転落率(単位は1,000患者日)を比較した結果2.06から1.53へと有意に減少した。
4. 科学研究費補助金「基盤研究C」	共	2012年4月～2015年3月	テーマ：「父親・母親に対する産後うつ病予防統合プログラムの開発」助成金：5,330千円	生後4か月児を持つ父親と母親2,032組を対象に平成25年1月～4月の期間に自己記入式質問紙調査を行った。867組(42.7%)を分析し、14.9%の父親、10.6%の母親がうつ状態であり、5人に1人の乳児がうつ状態の親に養育されていたことがわかった。母親のうつの関連要因としては、育児の相談者がいないこと、子どもの病気、パートナーがうつ状態、望まない妊娠などであった。また、父親のうつの関連要因として、経済的な不安、不妊治療、パートナーがうつ状

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
5. 科学研究費補助金「学術研究助成」(若手研究B)	単	2010年4月～2012年3月	テーマ:「入院する小児の転倒転落リスクアセスメントツールの作成とその効果に関する研究」助成金: 1,040千円	<p>態、仕事のストレスなどであった。また、うつ状態の親は子どもに否定的な感情を持つ傾向がみられた。現在はこれらの結果にもとづいたプログラムを構築中である。</p> <p>本人担当部分: データ収集、分析 共同研究者: 西村明子(研究代表者)、藤田優二、石原あや、大橋一友、勝田真由美、末原紀美代</p> <p>小児用の転倒・転落リスクアセスメントツールを作成するために、デルファイ法の調査を実施した。転倒の危険因子34項目と転落の危険因子34項目を明らかにし、小児用転倒・転落リスクアセスメントツール(C-FRAT)を作成した。小児が入院する病院252施設の横断調査により、転倒・転落率の低下に効果があると考えられる防止対策を明らかにした。これらの調査結果より、小児用の転倒・転落防止プログラムを作成し、小児が入院する6病棟で6ヶ月間実施した。入院患者の10.5%を対象に実施した。転倒・転落率に変化はなかったが、転倒・転落と関連のあるアセスメントツールの危険因子と、そのアセスメントツールの妥当性について明らかにすることができた。</p>
6. 平成22年度兵庫医療大学学内研究費助成	単	2010年10月～2011年3月	テーマ:「入院している小児の転倒・転落事故防止家族用オリエンテーションビデオの作成」助成金: 200千円	<p>デルファイ法による調査により、小児の転倒・転落の危険因子を明らかにした。その結果をもとにイラストの作成を依頼し、親しみやすいアニメーション形式の転倒・転落防止に関するオリエンテーションDVDとパンフレットを作成した。入院した小児の家族がDVDを視聴した後にアンケートに回答してもらい、転倒・転落防止に関する注意事項12項目全てにおいて視聴前よりも視聴後で有意に理解度が高くなっていった。</p>
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			